

# 不在の中の存在 — 作為の痕跡



## ● コンセプト



「シーツの皺」という痕跡（インデックス）を画像編集によって作為的に作り出す作品。

痕跡は「かつては確かにここにいた」存在のみを示し、その明確な主体者を示さない。例えばシーツの皺はそこで眠った存在を示すインデックスであるが、それが何者であるか、どんな感情を抱いていたのか 私たちは読み取ることができない。

しかしだからこそ、そうしたフラットな状態のまま主体が揺れ動くその存在に 私たちはそれぞれにとっての存在を見る。

あなたにとっての主体者がそこにいる。

この作品は  
「本来は自然にできるはずの“痕跡”」を故意に作り上げることで、  
「本来はある特定の個人によって形成される“痕跡”」における  
主体者の対象を匿名化・複数化する。

そうして生まれたこれらのイメージは  
「存在しない痕跡」「誰のものでもない痕跡」として  
確かにあなたにとっての痕跡となるだろう。



## ● 制作について



←の作品の基となった写真の一部。これらの素材をAI技術や加工・編集などで組み合わせ「誰のものでもない痕跡」を制作している。



## ● 実施活動について

今回のプロジェクトでは“痕跡”の中でもベッドに残るシーツの皺に着目し、寝具を撮影した写真を基にAI技術や加工・編集を用いて、本来は自然にできるはずの“痕跡”を故意に作り上げることで、本来はある特定の個人によって形成される“痕跡”における主体者の対象を匿名化・複数化させた。またそれらのデータを印刷し三次元に還元・展示することで、展覧会場という公の場で鑑賞者に私的な経験を想起させることであなたにとっての「誰か」と誰かにとっての「誰か」の主体が保留されることを目指して展示活動も行った。